
ポケモンの世界に来てしまいました。

追憶の俺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンの世界に来てしまいました。

【Nコード】

N1489Y

【作者名】

追憶の俺

【あらすじ】

目覚めたところ、そこはポケットモンスターの世界……

突如その世界に迷い込んだ青年、「九堂 椿」は「元の世界に戻る」なんて事は考えず「この世界で人生を楽しもう」などという考えで持ち前の廃人知識を使い、その世界に一步ずつ足を踏み入れていく……
これは廃人とポケモンの不思議な不思議（笑）なお話

本作品はご覧の通り廃人要素が入っております。また非公式シリ

「ズ」の地方、人物、ポケモンなどが登場するので苦手な方は「もどる」をオススメ致します

はじめに

どうも、はじめまして。追憶の俺です。

小説を書くのは初めてなので、至らぬ点などございますが、宜しく願います。

なお、二日に一回、不定期連載になるかもしれません

この小説は、最強系オリ主、後に非公式のポケモン、キャラ、地方などし登場しますので、

そういうのが苦手な方は「もどる」おススメします

ちなみに何処かの催眠厨のように伝説で無双などはしないかも
しれません（笑）

それでもOKな方は、お進みください

それでは追憶の俺の素敵な冒険（笑）話をとくところご覧あれ

「それは、突然起きた……

目を覚ましたら……違う所にいたんだ……」

第一話 目覚めたところは……（前書き）

あまりにもグダグタなので修正

第一話です。どうぞ

第一話 目覚めたところは……

第一話

あ……れ……？

「此処……何処だ？たしか……昨日寝てそれから……駄目だ全然思
い出せねえ……」

見渡すところ緑の木々ばかりで何処かも分からない……多分森に迷
ったんだろう……多分

「さて、どうする……かな」

青年が歩みだそうとすると、何か黒いものが飛び出した。
そして青年を見つめる……

「ん……？」

青年が目を擦り、再度確認する

「ちよつとまでよ……？こいつどこかで見たことあるような……え
……マジ……か……？」

突然出てきた「何か」を青年は知っていた……否、彼にとっては
知らないはずもない

「夢……じゃないよな……」

それがこいつとの旅の始まりだった

To be continued.....

第一話 目覚めたところは……（後書き）

次回、主人公の名前が出てきます。

第二話 ポケモンの世界にきてしまいました。(前書き)

二話目です。どうぞ

第二話 ポケモンの世界に来てしまいました。

「黒いやつ」と出会って数分経ち……未だに森の中をさまよっております。この歳で迷子だなんて……

で、その「黒いやつ」は……

「ズバツ！ズバツ！」

と、多分「あっちだ」と道案内してくれているようです。

ちなみにこいつは多分ズバツトというポケモン……だったけ

まあ簡単に言えば……俺は「ポケモン」の世界に来ちゃったらしいです。

いやあ驚いた、なんせ目の前にズバツトがいるんだから、変なデ
ンションが出ております（笑）

……あ、自己紹介がまだだったような気がする

では改めて、俺の名前は「九堂 椿」この世界だと「ツバキ」に
なるのかな。

ポケモンは努力値とか個体値厳選とか、なんか廃人っぽいことし
てたな。

んで、この黒いのか「ズバツト」まあ真っ黒ってほどじゃないけ
ど。

ベルトに付いてたモンスターボールを確認してみると、どうやら所有者は俺らしいのでパートナーって事にしておきます
初めてのポケモンがズバットだって？まあ育て方によって無限大の可能性があるので気にしません

もちろん元の世界に帰ろうなんて微塵も思っていないません、というか方法が無いという(笑)

此処に来た以上、とことんやってやりますよー？

第三話 旅立ち（前書き）

三話目です。どうぞ

第三話 旅立ち

前は「とことんやってみますよ」と言ったものの、まだ森の中を彷徨っております。……自分が恥ずかしいよ。

それと驚いたことがもう一つありました。近くに綺麗な水辺があったので顔を洗いに水面を見ると……

「え……これホントに俺デスカ？」

そう、顔が別人みたく変わっていました。しかもHG・SSのラバルに瓜二つという。……漫画と名前同じだから？……あれ、もしかして憑依したの？俺？

……なんかツッコむの疲れてきたよ。

まあ、どちらにせよ此処を抜けないと旅は始まらないんだからさつさと此処を抜けないとな……

と、ツバキはズバットを見てある提案を思いつく。

（たしかこいつ「そらをとぶ」使えたような気が……それにもし憑依しているのならきつと技マシンがあるはず……）

ツバキは、腰にあるポーチからディスクが数枚入ったケースを取り出し、ひこうタイプのディスクを探す……あつた。

「へえ、一応見た目は普通のディスクにみえるけど……試すか……えーつと、これをこうして……」

付属の説明書を見ながら準備をしていく。

しばらくお待ちください……

「うっし、これのできるはず……ズバット！こっち来てくんないかな？」

「ズバ？ズバツ」

と、ズバットは嬉しそうにツバキの方へ飛んでいく

「よし、んじゃ、ここをこつして……セット！」

……

ズバットは新しく「そらをとぶ」を覚えた！

「じゃ、いくか！ズバット、そらをぶー！」

「ズバツー！」

そして俺たちは大空へと飛び立っていった……

「さあ、冒険の始まりだ！」

第三話 旅立ち（後書き）

なんか打ち切りみたいな終わり方しましたが、まだまだ続きます

（笑）

「そらをとぶ」使用時のポケモンのサイズとかはまあ、仕様なので
気にしな（ry

ツバキ「やかましい」

ぶぶおおおおおお！？

ツバキ「次回もお楽しみに」

第四話 カントー地方（前書き）

すこし更新が遅れました。では、どうぞ

第四話 カントー地方

あの日から一年経ち……今、カントー地方にいます。はい、飛ばしすぎですね。

あれからハウエン、トーホク地方をまわって今のようになっています。ちなみにトーホク地方は非公式シリーズの地方で、カントーの遙か北の方向にあります。

あと一年間パートナーだったズバットはというと……

「ズバット！」

はい、進化させずにそのままにしております。ポケモンは、進化前でもやたらと強い個体も作ることも可能なのです。ズバットでもズバットでも。（大事なことなので二回言いました。）

さて、今どこにいるのかというと、ニビシティに来ております。

多分ジムリーダーはタケシのはず……なのですが……

「おまえが挑戦者か？俺が相手をするぜ。」

聞こえた声は幼い声、あれ、タケシじゃない……

「あれ、タケシはどこだ？」

思わずそう聞いてしまった。すると

「ああ、兄ちゃんなら旅にでたぞ。」

はあ！？なんで旅に出てんだよ！？ってことはアニメの世界に来たのか俺は……何かの冗談ですよ、ははは……だって一年も旅してたんだから、気づかない筈が無い筈……

「はあ……んじゃ、やるか……」

ため息をつき、だるそうに言う。あぁ、なんかため息ばっかだなあ……

「では、これよりジムリーダー vs 挑戦者ツバキの試合を始めます！なお、ポケモンの入れ替えは、チャレンジャーのみとします！」

ジムリーダーよりも幼い声と言う。……兄弟何人いんだっけ？なんか観客席っぽいところも同じ顔してる奴いるし。おっと、始まりそうだな

「それでは、始め！！」

審判の音がスタジアムに鳴り響く！

さぁ、始めようか！！

「バトル スタンバイ！！」

戦いの火蓋は切って落とされた……

第四話 カントー地方（後書き）

「なあ」

ん？

「なんで飛ばした？」

え、えーっと、その、「ごしゅごうせし」「ぐぱあああ！？」

「次回もお楽しみに」

……なあ

「ん？」

なんでここにいるん……だ……？

「そらをとぶ」

えー……

第五話 ニムジムの戦い（前書き）

五話目です。とらとらー！

第五話 ニビジムの戦い

「それでは始め!」

と、高らかに声がジムに鳴り響く。

「ゆけっ!ハガネール!」

ジムリーダーはハガネールか……タケシのやつだよ。絶対。はあ、どんどんアニメフラグが……

「……バタフリー、バトルスタンバイ」

ダルそうに言う……まあ出すとき「バトルスタンバイ」って言ったのは、迷ったんですね、最初。んなわけでシンジくん、餃子あげるからさ、許してね。

さて、相性的にはこちらの方が不利だが、こっちには秘策ある……
…といってもゲーム世界の一般的戦略だが

「相性ではこちらの方が有利、交代します?」

「まさか、こいつで……倒すんだけど。」

「!?!……わかった、ハガネール!いわなだれだ!」

いわなだれがバタフリーに直撃すると思われたが……

「!いない!?!」

「後ろだよ、ねむりごな!!」

と、バタフリーは緑色の粉をハガネールに振り掛け……

「ネーール!?!?……zzz」

直撃し、眠り状態に

もともと素早さが低いこと、そしてバタフリーの特性である「ふくがん」によってかわすことはおろか、至近距離で撒いたのでほぼ確実に当たるはず。

「くっ……でもどうやって攻撃を……」

「簡単な事、みがわりさ」

「……!」

そう、「みがわり」は自分の体力を削って、代わりに自分の「ダミー」を出す変化技

一般的にはこの間に積み技とか、やったりするのかな

さあ、この嫌がらせをジムリーダーさん、突破できるかな?(笑)
そういや、このジムリーダーの名前、なんだっけ

「なら……もどれ!」

おっ、交代か、眠ってたらいかに自分が不利になるか解ってるね、
さあ次は何しようかな……

第五話 ニビジムの戦い（後書き）

はい、ツバキが危ないです（笑）

私自身バタフリーにはハメられましたので……

次回もお楽しみにっ！

第六話 ジムリーダーは初心者(前書き)

六話目です。相変わらず短いですが、どうぞ

第六話 ジムリーダーは初心者

交代か……さあどうするか……んーなんか忘れてるような……

(交代はチャレンジャーのみとします!)

……あ……忘れてるね。完全に

「なあジムリーダーさん。」

「……??」

気付いてねー……

「あのさー、交代ってチャレンジャーだけじゃあなかつたっけ？」

「………!?!?!す、すみませんでしたー!?!」

おいおいおいおいっ!!覚えとけよおおっ!!

心の中で叫ぶ。てかジムリーダーさん。覚えようよ。マジで。そんなリアルに土下座されてもなあ……

「じ、じつは最近ジムリーダーを任されたばかりで……」

……なる。ってかこんな子供に押し付けるのか……そもそも子供でもジムリーダーになれるのか？あんま覚えてないや

まあともかく……

「……基礎くらいは覚えようか」

「……はい……」

なんかこいつほんとにジムリーダーか？って思ったわ……さっきの勢いはどうした？はあ、疲れる。

「と、とりあえず……もういつかい、出て来て、ハガネール」

「……zzz」

やっぱり寝たまんまか……しゃーない、バトル続行だな

後でハガネール誰のか聞いておこ

第六話 ジムリーダーは初心者（後書き）

はい、交代はチャレンジャーのみなのに何故入れ替えたか。そのり
ゆうを書いてみました。次からはマトモなバトルをします。……多分
ツバキ「多分かよ」

では次回もお楽しみ

第七話 本当のバトル（前編）（前書き）

我慢できなくなりました。

すみません、七話目です。どうぞ

第七話 本当のバトル（前編）

取り敢えずバトル続行とはなったが、まだツツコんだところあったよね。例えば「使用ポケモン」とかさ

聞いてみたところ、やっぱり審判忘れてたらしい

一応確認だがこの世界のジムバトルは大体は「使用ポケモンは三体」のシングルバトルで行う。道具については使用は禁止、持たせるといのはまだ広まってはいない。俺が旅したトーホク地方は持たせるのは実用化されていたが広まるまではまだまだってところ……かな

ツツコミ所満載だが仕方ないかな……

「さて……バトルするか」

「は、はいっ！」

うん、緊張してるね。それはさておき……今ハガネールは眠っていて立場的には不利。しかし、あのハガネールが借りたやつだとすれば……眠っている状態でも行動可能な唯一の技、「ねごと」を覚えていている可能性だつてある

防御の種族値が200とパルシエンをも超えるタフさでタイプ一致の弱点技を食らってもまず落ちない。対する特殊技には弱くタイプ不一致でも弱点を突かれれば一撃で倒されることが高いという欠点がある。

よりタフにするなら「ねむる」そしてそれを併用した「ねごと」を覚えていても別におかしくは無いと思う。現に「ステルスロック」を撒いて「ほえる」で交代させたり、相手の防御が高ければ「どくどく」んでピンチになりゃ「だいはくはつ」といったヤらしい型も存在するんだし混ぜても悪くはない

まあそれに気付いたらいいんだが……多分無理だろう。バトルの経験が浅そうだし……一つ助言でもしてやろう

「ジムリーダーさん、確かに眠っていたら不利にはなるが……逆にそれを利用して相手の意表を突くことだって出来るんだよ？」

「……!?!」

「まあ大事なのは、焦らないこと……そして、どんなにピンチになっても必ず諦めない事だよ」

「……っ!?!? ……はい……俺は絶対に諦めない、そしてあなたを倒します!?!」

うん、良いよ良いよ。やっぱり諦めない心っていうのはとても大事。最後まで何が起こるか分からないのがポケモンバトルの良いところだよ

「いくよ、ハガネール!?!」

「zzzz……」

「やはり眠っているけど何か方法が……!?!そうか!?!」

ん、何か気付いたみたいだな

「眠っているときにも出来る事……ハガネール！ねごとだっ！！」

ハガネールは銀色の粒子に包まれながら回転し、バタフリーに突っ込んでいく……

あれは……ジャイロボール！？「バタフリー！！来るぞ！」

「フリ〜〜！」

バタフリーもそれに応答し、交わす

「あくむ！」

バタフリーの目がハガネールに向かって怪しく光り、ハガネールが段々苦しそうな顔になっていく

「！ハガネールっ！？」

「あくむ……それは眠っている相手に徐々にダメージを与えていく変化技……さあいくよバタフリー！止めのねっぷうー！！」

「フリ〜〜〜〜っつー！！」

羽を飛ばたかし、灼熱の突風がフィールドに吹き荒れる。元々の特防の低さ、そして「あくむ」のダメージで当然……

「は、ハガネール、戦闘不能！バタフリーの勝ち！」

「……もどれ！……よく頑張ったね、ありがとう」

やはりポケモンに対しての愛情はあるな。良いトレーナーになれると思うよ。あの子ならね

さあて、面白くなってきた!!

第七話 本当のバトル（前編）（後書き）

はい、投稿してしまいました……すみません

「あくむ」は二世代で覚えます

主人公紹介(十一話まで)(前書き)

はい、中途半端です、ごっご。

主人公紹介（十一話まで）

主人公：ツバキ（九堂 椿）

何故かこの世界に突然トリップしてしまった青年。年齢は17。別に高校生名探偵ではない

現実ではそこそこ勉強、そこそこの身体能力と中途半端さをずっと通していたが、ポケモンの事に関しては、密かにやり込み、そしてついに「廃人」と化した。両親曰く、「勉強もあれくらい頑張ってくれたら良いのに」と呟いていたんだとか。

たまに「餃子あげるから許してね」とかキャラに対して訳の分からない事を言うが、分かる人には分かる「ネタ」なのであまり気にしない方が良いのかもしれない。

性格は少しめんどくさがり屋。つつこみ役でもある。こんなんだが実はトーホク、ハウエンを一度制覇してチャンピオンの称号を勝ち取った。（両方ともすぐに辞退。彼曰く「もつと旅を続けたい」とのこと。そのためか、最近、各地方でツバキを探す人が増えたんだとか）

現在判明している使用ポケモンはスバット・バタフリー・スピアー・リーフィス・フリーデインの五体。

ズバットはこの世界にきて以来ずっとパートナーとしてツバキと共に旅をしてきた仲間である。某マサラ人のピカチュウ的存在

ちなみに虫タイプが好きなんだとか

まだまだ公開していないポケモンもいるが中には「神と呼ばれしポケモン」もいるんだとかいないんだとか

現在カントー地方で旅をしている。やはりチャンピオンを目指すらしい

たまにあとがきに「そらをとぶ」を使って来るが気にしない。この世界に来てもしっかりやることはゲームとあまり変わらないが性格とか個体値は気にしない派である（そもそも厳選とかしたらさすがマズいので）

ちなみに弟子がいたことが判明した（九話にて）多分フラグが立っている。うん、爆ぜればいいのに

主人公紹介（十一話まで）（後書き）

ちなみに容姿はHG・SSのライバルと瓜二つです

無駄な所とか沢山ある気がしますが、気にしないでください（笑）
他にも更新次第随時更新する予定です。

それでは

第八話 本当のバトル（後編）（前書き）

サブタイトルって付けた方が良いのかなーってたまに思います。
どろどろっ

第八話 本当のバトル（後編）

さあハガネールを倒したのだが……次はどんな奴が来るか

「ゆけっ……ゴローニヤー!!」

「ゴローニヤー!!」

ゴローニヤか。にしてもやる気満々だな

ゴローニヤは攻守共に優れるが同タイプのドサイドンのよりややステータス面では負けている

しかし「体力満タンで一撃で瀕死になるような技を一度だけ耐える」という特性の「がんじょう」は厄介である

どれほど厄介かという……「その後の展開次第」で下手すりや3タテは可能であるという事……かな

だが……やはり特殊に弱いのはハガネールと同じなだけだね

「……速攻で決めないと面倒だな。バタフリー、いくよ?」

「フリー〜!」

何時も通りに返事をしてくれるバタフリー。うん、バタフリーには悪いけど今回は落ちるかもしれない……まあ最後までやらせてもらうよ?」

「いくよバタフリー! エナジーボール!!」

バタフリーは緑色の球体放ち、ゴローニヤに接近していく

「！！？来るよ！まもる！！！」

「ゴロツッ！」

と、守りの体制に入りエネルギーボールを受け止める

「ゴ……………ゴロツッ！？」

しかし、受け止め切れずまともに受けてしまい、爆風で吹っ飛ば
でしまう

「ゴローニヤ！？」

「ゴ……………ゴロツッ……………！！」

エネルギーボールをまともに受けたせいか、ボロボロである。

やっぱりがんじょうが発動したか……………だがあと一撃入れれば…

……………

「なら……………ロックカットだ！！！」

あー……………

そう考えてた俺の考えは甘かったらしい

そう、「ロックカット」「こそが「後の展開」のカギとなるのだから……………

元々素早さの低い岩タイプの補助ともなる技、「ロックカット」
積みめばクロボット、又はサンダースといった130族といったポケ
モンの素早さを超えることも可能である恐ろしい技

そしてそこからのタイプ一致の「ロックブラスト」とかなり厄介
である。この世界じゃ「攻撃は基本的に当たる」という概念は無い
のでこれだけでも強力、さらに「つるぎのまい」なんてやられたら
手出し出来ない

はぁ……マズいな

「とりあえず回避に専念するぞバタフリー」

「そうはさせない!!ゴローニャ!ロックブラスト!!」

と、突然バタフリーの後ろにゴローニャが現れる

「っ……………!?!」

はええなオイ!てか何で俺が恐れてることばっかするんだ!?!心
読んでんのかコイツはっ!?!

お約束ですよー何となく。by作者

やかましいわっ!!「かげぶんしんで交わせっ!!」

バタフリーは分身を作り、攻撃を交わしていくがゴローニャの素
早さに対応できずどんどん分身が消されていく……

「……そこだっ！ゴローニヤ！撃ち落とせっ！」

「ゴロツッー！」

「フリ〜っ!?!」

空中からバタフリーを撃ち落とし、共に落下していく

「くっ……こうなったらバタフリー！……！……！」

ツバキの声と共にドオオオオンッ！と轟音が鳴り響く

晴れた土煙りから現れたのは……

「フ、フリ〜……」

「バタフリー戦闘不能！！ゴローニヤの勝ち！！！」

「あらら……やられちゃった」

「やった……！やったよゴロー……ニヤ………?」

するとゴローニヤの体が傾いて……

「!?!?ゴローニヤ！戦闘不能!?!」

な、なんだって！？まだゴローニヤの体力はまだ残って……」「ふう……どくのこなが効いたようだね」！？

そんなツバキさんの言葉が俺の耳に刺さった………凄………あんな状態でそんなことが出来るなんて………俺も負けてはいられないっ！！

ふう、うまく決まったようだね

「戻れ、バタフリー」

サンキューな、バタフリー。頑張ってくれて

「さあ次はコイツでいくよ！スピアー！バトルスタンバイ！！」

「お前が最後だっ！がんばれ！ドサイドン」

スピアーとドサイドンがフィールドに現れ、お互い睨み合っている

「スピアー………また相性の悪いポケモン………」

んでサイドンを出したあんたもどうかとは思っが………まあ良いか

「一気に決めるよ！！がんせきほう！」

つと来たか………だけ………

焦ってゴリ押ししたら負けるよ？

「スピアー、こらえる」

「スピっ!!」

スピアーは「こらえる」の体制に入り、がんせきほつを受け止める……

「ス………スピ………っ!!」

「っ！耐えた!？」

「焦って攻撃しても意味ないよ？スピアー、がむしゃら」

「スピ………っ」

ドサイドンに突っ込んでいくがドサイドンは反動のせいで交わすことが出来ない

「ドサっ!？ドサアアアっ!!!!」

モロに喰らったドサイドンは吹っ飛んでいく

「アダメのどくづき……」

「くっ………!!!!」

「ドサイドン戦闘不能……スピアーの勝ち……」

「こうしてジムバトルは終わった……」

第八話 本当のバトル（後編）（後書き）

次回は急展開……かもね
ツバキ「かもかよ」

それでは次回もお楽し

第九話 ライバル(?) 登場 その名はミドリ(前書き)

九話目です、どぞ

あと、サブタイトルを付けてみましたっ

第九話 ライバル(?) 登場 その名はミドリ

「さあ、そろそろだよ。」

そう言ったのは十代くらいの少女。今、カントー地方の空にいる。

一匹の火の鳥のようなポケモンと一緒に

「あの人は今、この近くに……いた!あそこだよ!一気に急降下して!」

そして少女とポケモンは地上に降りていく……

もの凄いスピードで

「もうすぐ会えるよ、フィニクスっ!」

「フウオオオーっ!」

そう言われた火の鳥……フィニクスは高らかに声を上げる

もうすぐ……もうすぐで会えますよ!

私たちにいろんな事を教えてくれた師匠……いえ……ツバキさん!…!

「これ……グレーバッチです……」

うーい、グレーバッチ、ゲットたぜ。……なんてね

「……………」

「……………そう落ち込むなよ、凄かったぜ？途中でヤバいなって思ったんだからさ」

「ほ、本当ですか？」

「ああ、一言だけであんな凄いことできるんだから絶対良いトレーナーになれるよ。ジロウ君」

「そ……………そんな……………というか、名前知ってたんですか？」

ジロウが少し照れた顔で訪ねる

「ん、まあね」

……………今思い出したなんて絶対に言えないけどな……………

「ツバキさん……………必ず俺、ツバキさんを」「ツーパーキさ」「ドオオオオオオオオンッ！！」「！！！？？」

突如、物凄い音がニビシティに鳴り響いた。近くの人も沢山集まってくる

「何だ……………って……………！？何でいるのや……………」

「あいたたた……… やっぱり、急降下はマズかったかな………？」

少女は服に付いた砂を払いながら言う

黒いブーツに、緑色の長袖の服。頭の白い帽子っぽいのが特徴的な少女

俺はコイツを間違いない無く知っていた……

なんせトーホク地方で共に旅をした仲間……「ミドリ」だったのだから……

「お久しぶりです！ツバキさん！！」

「あ、ああ………」

俺はこう言うしか無かった……

苦笑いで

またた溜め息が増えそうだな………

フィニクス　　ふしちょうポケモン

ふしの　でんせつと　いわねている。

しゃくねつの ほのおを はなち

てきを あとかたもなく もやし つくす。

(登場作品、ポケットモンスターアルタイル、シリウス、ベガ)
非公式である

第九話 ライバル(?) 登場 その名はミドリ(後書き)

と、いうことで新キャラと、非公式ポケモンを出しました

おまけに短い……

今回はツバキvsミドリです

お楽しみにっ！

サブキャラ紹介(前書き)

ツバキ「オイ作者」

……？

ツバキ「いや、？じゃないだろ。俺とミドリバトルじゃなかったのか？」

ああ、……… Wiiが逝ったんだ

ツバキ「ふむ……… へ………？」

てな訳で急遽 p s pで書くことになったんだよ

ツバキ「マジかよ」

マジ。まあ明日なんとかするよ

でわ、どうぞっ

……… もしかしたら今後プロキオン・デネブのキャラ出すかも

サブキャラ紹介

ミドリ（ヒイラギ・ミドリ）

トーホク地方、ハクジタウン出身。現トーホク地方チャンピオンマスター

現在セトグニ地方（ジョウト、ホウエンの間にある。日本に例えると中国地方）のポケモンを研究していた筈なのだが、何故かカントー地方にやって来た。何故か

ハクジタウンのヒイラギ博士の娘であり、ツバキの弟子。

性格は明るく、頑張り屋であるが後の事考えず、それが原因でえらい事を起してしまうすこしおちゃめな一面も

現在判明している所有ポケモンはフィンクス・ルカリオ・ガブリアスの三体

十二話でツバキの旅に付いて行く事に

ツバキの事が……？

ジロウ

カントー地方ニビジムのジムリーダー。旅に出た兄タケシに代わり、ジムリーダーを勤めている

バトルの知識、経験は浅いものの飲み込みが早く、将来有望なトレーナーになるだろうとツバキは言っていた

ピンチになったら、焦ってゴリ押ししてしまい、それが敗北につながってしまった。ジムリーダーとしてはまだまだである

所有ポケモンはハガネール、ゴローニヤ、ドサイドンの三体。恐らく父ムノー、或いは兄タケシのポケモンである。(ツバキ曰く)

弟のサブロウは審判を勤めている。

サブキャラ紹介（後書き）

作者

突如登場した天の声に等しい存在
八話で登場したが、ツバキに一括される。

引き続き登場を狙っているがそんな事したらツバキに殺されるの
で出番はこれっきりかもしれない

が、十一話でちゃっかり登場してしまっている（勿論一括された
が）

どうでも良いがブースター愛好家

所有ポケモンは不明。というか登場しないだろう。多分

ツバキ「……作者の説明はいらんだろ。そして後書きに書くな」

えー折角出番があったんだし別に良いじゃんよ

ツバキ「……あ、そ……」

冷たっ!?

では次回もお楽しみにっ!

第十話 ツバキvsミドリ あの時のリベンジ果たすため(前書き)

十話目です。とじりゃっ！

一流のトレーナーになるか、それとも博士の元でポケモンの研究の手伝いをするのか、最初は町の人はもめたらしい

「ツバキ君、君にはこの子達と一緒に旅に出てもらえないかな」

そんな提案が俺の耳に届いた。勿論この時、また双子が驚いたのは省かせてもらう

まあ俺もハウエンのときは、一人だったし、別に良いんじゃないかなという事で喜んで引き受けた

ここから俺、ミドリ、カズキの旅が始まった

で、目の前にいるのがそのミドリなのだが……

「なあ、カズキは……どうしたんだ？」

「ふえ？えつと……お兄ちゃんには、トーホクのチャンピオンの代理を……」

おい、そりゃ無いだろ。チャンピオンってかなり暇なんだぜ？

まあ中々チャレンジャーが来ないから勝手に何処かに行ったりしたりすることもあるけどな……

そのころ……カズキは……

「へっくしっ！……んー風邪かあ？」

別の場所でぶらぶらしていた……

「で、なんで此処に？」

「それは勿論、シャクドウ島でのリベンジを果たすために此処にきたんです」

とミドリの表情が変わる

シャクドウ島、そこはポケモンリーグが行われる場所として有名である

俺は予選でミドリと当たり、勝利した

そっぴや、ミドリ負けたとき大泣きしてたな……よっぽど悔しかったんだろう

まあ、分からんでもないが……

バトルをする以上、俺も負けるわけにはいかない。だが……

「……明日にしてくんないかな？さっきのジム戦で疲れてるポケモンがいるからさ。いいかな？」

それにもう夕方だしね

「そういう事なら……分かりました！明日楽しみにしてますね」
「こうしてミドリと明日バトルすると約束し、ポケモンセンターで夜を過ごした……」

そして翌日

ミドリはやる気満々である。フィニクスも一緒か

「審判は俺に任せて下さい」

と、ジロウが言い準備が揃った

「使用ポケモンは三対のシングルバトル、道具の使用は無しだが持たせるのは有り。入れ替えも有りでいいね？」

「はいっ…！」

このルールはシャクドウ島の大会を再現したものである

さて……あれからどれだけ変わったか見せてもらおうかな

「フィニクス！まずは貴方からだよっ！」

「フオオオオーーーーーっ！！！」

「スピアー、バトルスタンバイ！」

「スピっ!!！」

両者のポケモンが繰り出される

フィニクスはほのお、ドラゴンタイプ

特攻種族値120という厨ポケ級の使い勝手が特徴的
ちと不利かな……

「始めっ!!！」

「フィニクス、かえんほうしゃで先制を取るよ！」

「こっすくいどうでかわせっ!!！」

まずは素早さを上げ、そこから策を練るか

といってもフィニクスの素早さの種族値は100以上あるので油
断できない

「させないっ！後ろに回りこんで！」

……ほらね

と、あっけなくスピアーはフィニクスに背を向けてしまう

「かえんほうしゃ!!！」

フィニクスの口から炎が湧き上がる

うん……今回はピンチになるかな？

第十話 ツバキvsミドリ あの時のリベンジ果たすため（後書き）

はい、ということとでなんとか十話目が更新できましたっ！

それでは次回もお楽しみに！

第十一話 ツバキvsミドリ リーファイア?いいえ、リーフィスです(前書き)

うん、ラピユタはいつ観ても良いよね

ツバキ「どうせ「人がゴミのようだ!」とか「三分間待つてやる」とかムスカの迷言で喜んでるんだろ」

やかましいわっ

それはさておき……お待たせしました!十一話目とっつぞ!

第十一話 ツバキvsミドリ リーファイア?いいえ、リーフィスです

「かえんほうしゃ!!」

と、スピアーの背後に炎が迫る

「こつそくいどうでかわせ!!」

「かえんほうしゃ」が発射されるも四段階スピードが上がったスピアーは軽々とその場を離脱する

「ダブルニードル!!」

「スピっ!!」

フィニクスに連撃を入れる。相性はスピアーの方が不利なもの、ヒット&アウェイ戦法でいけばスピアーの方が有利である

「うう……あの素早さどうにかなんなかあなあ……」

あのスピアー……そう簡単に攻撃なんて当てれないしなあ

攻撃が外れば必ず「スキ」が出てくる。ましてや相手はその「スキ」を狙って来るので厄介である

向こうにも「スキ」があれば………

「どくじき……」

スピアーの「どくづき」がフィニクスに直撃しようとしたその時……

………！そうだ、「スキ」を作れば良いんだ！

「フィニクス！！かげぶんしん！！」

「どくづき」が直撃すると同時にフィニクスの体がシュッと消える………

「！？」

突然の事でスピアーも驚いている

さらにスピアーの周りにはフィニクスが複数いて、囲まれている

「これでスピアーは攻撃をかわす事が出来ない………それに本物もどこにいるのか分からない………積み技の大切さ、覚えていたようだね」

立場逆転か………短期間でここまでやるとは………やるじゃん、ミドリ

あれ………なんか顔赤くなってる

………もしかして声に出た？

案の定、ミドリは………

「えへへ………ツバキさんに褒められた………」

手を顔に当て、赤面していた……………

ツバキ、フラグ立て「黙れ駄作者」……………最後まで言わせ「ズバツト、エアスラツシュ」……………ちよ、待……………ギヤアアアアツ！！？

「……って、こんな事してる場合じゃない！！」

完全にハモリましたね。分かりま「黙れ駄作者！！」……………うわああああん！！ミドリちゃんまでええええつ！！

ツバキとミドリが天に向かって吠える

「……………」

その光景にスピアーとフィニクスも啞然としていた……………

「と、取り敢えずいきますよ！ツバキさん！かえんほうしゃ！！」

スピアーに業炎が襲いかかった。よし、これならイケ……………え……………？

しかし、黒煙が晴れた先には、スピアーがボロボロになりつつも飛んでいた……………

「嘘……………耐えることなんて出来な「気合いのタスキ。知っている

よね？」「……！」

あ、とミドリは気づいた

確かに耐久力が無いスピアーにはピッタリな持ち物……っ……
なんか悔しい……

「残念でしたっ。スピアーいくよ、ダブルニードル」

「スピーー……っ！！」

もの凄いスピードでフィニクスの分身を消し去り、本体に向かって突っ込んでいき、フィニクスに直撃する

「フィニクス！？」

お互いボロボロであるおそらく次の一撃が最後になるだろう……

「っ！フィニクス！一気にいくよ！ゴッドバード！！」

「ギガインパクトで迎え撃て！！」

「フォオオオオオオオオ！！」

「スピーー……っ！！」

両者共に目の前にいる敵に向かって突っ込んでいく

ドオオオオオオオオオオオンっ！！

「フィニクス!？」

「……………」

轟音の後の土煙が晴れた先は……

「……………両者戦闘不能!」

「……………もどれ!」「……………」

「サンキューな、スピアー」

「ありがとう、フィニクス」

相性なんか覆すその戦法……………やっぱり、ツバキさんは強いなあ……
でも、次はそうはいきません!

「ルカリオ!!お願い」

「リーフィス!!バトルスタンバイ!」

「!?!?リーフィスはこの地方じゃあ手に入らない……………ということ
は……………」

「ああ、昨日トーホクから転送してもらったんだ」

やっぱり転送してもらったんだ……………

リーフィスは同タイプのルンパツパの特殊に特化し、さらに防衛
面もルンパツパを上回る

うう……厄介だなあ……

リーフィス かんようポケモン

ひとを いやす パワーが あり

リーフィスの ちかくに いると

とても こごちよい きぶんになれる。

(登場作品、アルタイル、シリウス、ベガ)

第十一話 ツバキvsミドリ リーファイア?いいえ、リーフィスです(後書き)

ツバキ「今回は作者が拗ねたらしいから後書きは俺が進行する。

今回、リーフィスが少しだけ登場した。

防御、特防の種族値が100を超えているので、耐久方にはうってつけかな。また、晴れ、雨パでも活躍できるからサポートとしても使えると思う」

うう……どうせ俺なんか……

ツバキ「……まあ、ほっといたらすぐ立ち直るっしょ。

次回もお楽しみに」

第十二話 ツバキvsミドリ 決着(前書き)

十二話目です。ようこそ

第十二話 ツバキvsミドリ 決着

リーフィスとルカリオ

タイプ相性は互いに普通か。向こうはタイプ一致で押すかな……

「ルカリオ!はどうだん!?!」

「フウウ……………っ!」

ルカリオは両腕を構え、エネルギーを一点に集中させる……

「リーフィス、来るよ」

「フイーっ!?!」

うし、いけるな

「ウルオアアっ!?!」

と、青いエネルギー球体がリーフィス目掛けて飛んきた。

「っと、リーフィス、受け止めるか?」

それに応じてリーフィスは頷く。「はどうだん」は必中技だしかわす事は不可能

しかもタイプ一致なので痛い

「フイー……………っ!」

まあ、うちのリーフィスなら問題無いけどね

「！嘘っ！？」

「ご覧の通りリーフィスはピンピンしている。さらに持ち物は「たべのこし」で微量回復

この耐久型を落とせるか？

「なら……つばめがえし！」

「フィッ！？」

「……！また必中技か。しかも、ひこうタイプはリーフィスにとって弱点属性。ルカリオの素早さはそこそこあった筈

……俺のスパークみたくヒット&アウェイ戦法で完全に潰す気だね

「だが……そこでストップだ。

……やどりぎのタネ」

ルカリオが突っ込んで来たと同時に「やどりぎのタネ」を頭に埋める

「ルオっ！？」

当然、これでルカリオは自由に動けない。

「うっ……イヤらしい……」

「そりゃどうも。ギガドレイン」

どどんルカリオの顔色が変わっていく……

ホントは「どくどく」も入れたかったんだがはがねタイプだから効かないんだよね

まあ、今の状態はルカリオにとってはかなり迷惑な筈

ヤドリギで体力が減り、リーフィスが自然回復

ギガドレインで体力が減り、リーフィスが回復

更に「たべのこし」の効果でまた回復

多分リーフィスの体力はこれで満タンに近いはず。……ゴメンね、ルカリオ（笑）

「うっ……」

ミドリも半分涙目である。やり過ぎたかな？

しかし、これで止めないのがツバキである

「ソーラービーム、発射」

「フィーーーーーっ！！」

ドオオオオオオオオオオッ！！

「……………」

もはや審判、ミドリも顔色が絶望的だ。

後半はツバキの一方的なプレイで後続も同じような感じでボコられた……………」

「ガ……………ガブリアス……………せ、戦闘不能……………リーフィスの勝ち……………よって勝者……………ツバキさん……………」

「フィッ」

リーフィスも上機嫌である。なんか怖い

ちなみにガブリアスはさっき話した「後続」である……………」

「げきりん」で押した結果、受け止められそこから「やどりぎ」+「ギガドレイン」+「どくどく」+「たべのこし」のコンボを喰らい、最後に「ソーラービーム」で戦闘不能。

更に「まきつく」もされ、動けないので言葉通り「一方的なプレイ」でツバキとミドリバトルはで終わりを迎えた……

「うう……ツバキさん酷いですう……」

絶望的な表情に涙目……やり過ぎたな……

「わ、悪い……でもまあ最初の方は良かったんじゃないかな……？」

「！ほ、ホントですかっ！？」

さつきまでの暗い表情が嘘のように変わる。気が変わるのはええなオイ

「えへへ……」

ああ……なんか一人で別の世界にいつちった。はあ……

「あ、あの……ツバキさん！」

今まで影だったジロウが声をかける。いや、影ってないだろ……

「ん、なんだ？」

「さ……さつき言いそびれてたんですが……俺、必ずツバキさんを超えてみますから……！」

「あゝまたライバルが増えちゃったね。チャンピオンは辛いよね

「はい！ありがとうございます！」

そうして俺は二匹を去った

……で、

「なんているんだよ……」

「えへへ……」

はあ……

また大変な旅になりそうだな……

第十二話 ツバキvsミドリ 決着(後書き)

はい、という訳で旅仲間が増えましたっ！

次回もお楽しみにっ

番外 もつすぐ10000ユニーク突破というところで……（前書き）

今回は特別話という事でっ！

番外 もつすぐ10000ユニーク突破というところで……

もつすぐしで10000ユニーク到達だっ！

ミドリ「ですね！」

ツバキ? 「ああ、そうだな」

ミドリ「え、ツバキさんっ!？」

ああ、そいつは平行世界のツバキ。別の世界の文化祭に行ったツバキの代わりにツバキ役として本編に登場するから

平行世界のツバキ「ども、宜しく」

ミドリ「は、はあ……でも代わりとか言っちゃって良いの?」

大丈夫だ、問題無い

まあ、それはさておき改めて読者の皆様に感謝の印を

「「「読者の皆様、読んでくださって本当に有り難う御座います

!」「」

????? 「ふっ、これからも頑張れよ、作者」

ミドリ「だ、誰ですかっ!？」

????? 「安心しろ。私は今度作者が書く『転生モノ』に登場する

人物だ」

ミドリ「え？ええええっ！？」

平行世界のツバキ「驚きすぎだろ」

確かに。まあ、これからも「ポケ世」を宜しくお願いしますっ！

平行世界のツバキ「そんな愛称あったんだな……てか略しすぎじゃね」

良いじゃんよっ

それでは

番外 もつすぐ10000ユーロ突破ということだ……（後書き）

????「さて、そろそろ私は帰るとするか。

次は今度作者が書く『転生モノ』でまた会おう。

まあ、すこし先の出来事にかかるが……良いんじゃないかな？

読者とまた出会える事を、私は楽しみにしているよ」「

第十三話 ハナダシティへ（前書き）

十三話目、びびびっ！

第十三話 ハナダシテイへ

「はあ……」

溜め息を付く。え、なんでかって？

それは……

「えへへ……」

この通りミドリが勝手に付いて来たからだ

色々な意味でまた大変な旅になると思うと頭が痛い……

最初にミドリとカズキと旅をしたときだって喧嘩ばかりしていた

普段仲は良いくせに喧嘩となると凄いよ。コレが

仲直りにどんだけ時間かけたか……

まあ、今はそんなこと無いし今回はミドリ一人だけだから喧嘩は
まず無い

問題なのは……

「ツバキさん、どうしたんですか？」

ミドリが俺にくっ付いているんだよ……

目立つし最悪な時はそのせいで追いかけて回された事もあった。まあチャンピオンだもんな……

「な、なあミドリ。少し離れて……くれないか？俺達チャンピオンだったし街の人に見られると面倒だぞ？」

それに街の人の視線が危なくなるに違いない。それだけは勘弁だ

「……………はい……………」

しゅんとしながら離れるミドリ。……うん、なんかごめん……何か良い話題は……

「……………そっぴゃバッチ幾らくらい持ってたか？」

「……………ふっふっふっ」

何か怪しげな笑みを浮かべるミドリ。なんか怖い

「実はもう6つも手に入れたんですよ！」

そうやってバッチを見せる。へえ、残ってるのはハナダとセキチクのバッチか

「ツバキさんを探していたら何時の間にか……えへ」

ふーん……そっぴゃ俺のバッチは……

「……………あ、俺も6つだ」

「……………」

突然黙り込んだミドリ。あ、追い越したかったのか……………話ミスっ
たな

「まあ残ったのはハナダとトキワのb「ハナダのバッチ持ってな
いんですかっ!?!」……………驚きすぎ」

さっきまでのテンションが嘘のようだ

……………こいつは何で出来ているんだ?

「だって久しぶりにダブルバトルが出来るかもしれないんですよ
!」

心読んだ? まあどうでも良いか

ダブルバトル

ジム戦の場合この形式でやるジムは多くないが挑戦者が二人いる
時など偶に採用される。お互いのチームワークを試すって感じでね

「まあ今向かっているのはハナダシティだし……………ダブルバトル出
来ると良いな」

「はいっ! その時はお願いしますっ」

俺も、ミドリの変わったところ色々見てみたいしね

「つと、そろそろハナダシティに着くかな」

「本当ですか!？」

「……嘘だ」

「むう〜……」

「と言つのも嘘」

「う……意地悪……」

「悪い悪い……」

まあ話してたら時間が経つのも速いな

次はどうなるか……楽しみだな

第十三話 ハナダシティへ（後書き）

さて、次はハナダジム戦だっ

「ミドリ」はい！頑張ります！」

並行世界のツバキ「ああ、ジムリーダーが気になるな。ところで作者、代役上手くいつてたか？」

まあ、良いんじゃない？

並行世界のツバキ「そりゃどうも」

それでは次回もお楽しみにっ！

第十四話 遂にあのキャラ達と……！？（前書き）

十四話目です。今回は……！？

第十四話 遂にあのキャラ達と……！？

どうしてこうなった……………

目の前にいる少年を見て愚痴を吐いてしまっ……………

時間は少し遡る……………

「さあ着いた。ここがハナダシティだ」

「わあ……………」

ミドリは目を輝かせている。まあ景色が良いって評判があるしハナダのみさきとカリゾート土地としても有名だからな

「ね、ツバキさんっ!!」

「……………ん?」

「これ見てくださいよ!」

そう言って壁に貼られていた紙に指を指す

「なになに……………ハナダ美人姉妹の……………水中シヨ……………?」

へえ……………水中シヨ……………か……………

元の世界では餓鬼の頃水族館とかでショーを見たりしてたけど……
「水中ショー」は見たことないな……

つと、俺もまだ餓鬼だよな……

「公演時間まで結構時間があるけど……せっかくだし飯でも済ませ
せてから行くか」

「はいっ!」

と、またミドリが俺の腕にくっつく

「おいおい……」

「」

ああ、どっからどう見てもカップルにしか見えないよな……

そう思いながら額に手を当てる俺

しかし、これがキツカケで俺が予想もしていなかった事が起こる
うとしていたのは誰も知らなかった……

それは……昼食場で起こった……

飲み物を取りに行こうとしたら誰かとぶつかってしまった

「あ、すいません……」

「わ、悪い……」

お互いに顔を合わせると……

「彘………?」

肩にはピカチュウを乗せており、赤と黒のキャップを被っている十代くらいの少年……

そう……会うなんて思ってもいなかった人物……「サトシ」が俺の目の前にいました

「サトシ〜!」

と、オレンジ色の髪の色で片方を結んでいるのが特徴的な女の子、「カスミ」がサトシの名を呼びながなこちらに向かって来る

「……?サトシ、この人は………って………どこかテレビで見たよう………ああああああつ!!!!???」

うわぁ、最悪だ……

「?カスミ、どうかしたのか?」

「どうかしたかじゃあ無いわよ!?!この人、ほらテレビに映ってたあのチャンピオンの………!」

「な………!この人が………」

おい、ヤメろ。周りがこっちを見てくるじゃねーかよ

……ぎゅしてこっぴなった……

第十四話 遂にあのキャラ達と……！？（後書き）

ついにアニメキャラと遭遇！

次回もお楽しみに！

第十五話 サトシvsツバキ (前書き)

十五話目、どつぞど！

あとサトシファンの皆様、申し訳ありませんでしたっ！

第十五話 サトシvsツバキ

「こ、この人が……あのチャンピオンの……」

周りの人もなんかわらわら集まってくる。我慢の限界になった俺は………

「……フーデイン、テレポートよろ」

シュッ………

取り敢えずその場を離脱しました

「「ツバキさん（サトシ）……遅いな……」」

と、人が少ない広場にいた少女、ミドリとその隣にいた青年、タケシはそう呟く

……シュッ

「っと、悪いなミドリ。遅くなった」

「！？ツバキさんっ！」

「サトシー！」

「サンキューフリーディン、戻れ」

「ディーン！」

と、フリーディンをモンスターボールの中に戻す

「あのう……………」

「……………ん？何だ？」

「「やっぱり……………チャンピオンの……………ツバキさん……………ですよね？」

「

「え……………ええ！？」

タケシが驚く。まあさつき居なかったから仕方ないか

「……………はあ……………そう、俺がハウエンとトーホクのチャンピオンのツバキだよ」

「「「や……………やっぱりそうだったんですか！？」」

その質問に俺は頷く。……………なんかタケシがポカーンとしている

「ま、まさかチャンピオンにあ、会えるなんて……………」

そう言つとタケシが俺に迫ってくる

「じ、自分はタケシといますっ！あ、貴方のようなチャンピオ

ンに会えて光栄ですっ!」

「お、俺はマサラタウンのサトシといいます!」

「あ、アタシはハナダシティのジムリーダーのカスミといいますっ!」

うん、知ってる。てかみんな固まりすぎだろ?

「ま、まあそんなに固まりすぎなくていいから……別にタメ口で良いから……な?」

「」「は、はいつ!」「」

あ……駄目だなこりゃ

「あ……あの、ツバキさん!」

「?なんだ、サトシ君」

「俺と……」

バトルしてくれませんか!」

……は?

ごめん、今なんて……

(俺とバトルしてくれませんか!)

……いやあ、なんでさ

「これより、サトシvsツバキさんの試合を始めます！ルールは
一対一のバトルで行います！」

審判はタケシがやると言ったので任せた……なんでこうなる

「ちよつとサトシ！！開演まで時間が無いのよ！？」

「分かってるって！！ピカチュウ、相手はチャンピオンだ、最初
から全力でいこうぜ！！」

「ピカっ！！」

サトシのパートナー、光厨……じゃなくピカチュウがそれに応え
る。うお、やる気満々だなおい

てかサトシの語尾……「ZE！」にしか聞こえないんだが

「それでは始め！！」

……まあ、いいや

悪いが開演まで時間が無い……一瞬で決着^{ケリ}付けるか

「ズバット……バトルスタンバイ！！」

「ズバっズバっ！！」

ん？久しぶりの出番が来て嬉しい？……まあそうだな

「ズバット……俺のピカチュウとじゃあ相性は……」

「まあ相性なんて関係ないさ。サトシ君だってそうだろう？」

「！へへっ、そうですね。いくぜピカチュウ！！10まんボルト
！！」

「ピ~~~~カ~~~~……チュ~~~~~~~~っ！！」

今や、ピカチュウの代名詞となっているアノ技、「10まんボルト」が俺のズバットに向けて襲い掛かって来る

「……かわせっ！！」

「ズバっ！！」

ズバットは簡単に10まんボルトをかわす

「！！？速いつ！！」

「あのズバット、相当鍛えられているぞ！」

……タケシ君、うちのズバットは相当とかそんな甘っちょろい鍛え方はしてないよ？

「ズバット、そのまま上がれ！」

ぶつかった時の衝撃波が此処にいる全員を襲う

「キヤッ！」

「うおっ!？」

「……………っ!ツバキさん！」

「ピカチュウ！」

「ズバット！」

上から順にカスミ、タケシ、ミドリ、サトシ、ツバキの五人である

「ど、どつちだ!？」

晴れた煙の先には……………

「ピカア……………」

「ズバアアア……………」

「!?!両者、戦闘不能!?!」

「う、嘘……………相討ち……………!?!」

ミドリが驚く

まあ確かに驚いたが大体理由は付く

ひこうタイプの物理技の利点……物理全般にとって速ければ速いほど威力が増すがひこうタイプの場合、他のタイプと比べれば威力が桁違いなのだ

そして、タイプ一致だから威力は更に1.5倍加算され「ブレイブバード」は反動技。これだけでは無い、ピカチュウのポルテッカーだってタイプ一致で1.5倍威力が加算されしかも反動技である

まあ相討ちになるのも無理無いよな……………流石主人公といった所か

「よつて、この試合は引き分け！」

「まさか引き分けだなんて……………」

「まあ、久々に燃えたかな。有難う、サトシ君」

「いやあ、そんな……………」

俺もアニメのキャラとは会うなんて思っていなかったし変に興奮したからなー

「……………あ、開演の時間!…」

「……………!?早くしないと!」「……………」

「俺とサトシ君はポケモンセンターに行くからミドリは先に行つてよ!…」

「はいっー!!」

ふう、忙しいよー!

その頃……………

「へえ、あのズバット結構強いじゃん」

「これをボスにプレゼントすれば……………」

「絶対に喜ぶ筈ニヤ!そして……………」

「」「幹部昇任支部長就任良い感じー!」「」

「ソーナンス!」

迫り来る三つの影……………

果たしてツバキとサトシはどうなるのか!? 続く!

第十五話 サトシvsツバキ (後書き)

はい、アニメっぽい終わり方でしたね(笑)

相打ちになった理由は本編でツバキが話した通り+サトシ君主人公
補正発揮というところでしょうか

次回もお楽しみに！

特別話 チャンピオン達のクリスマス(前書き)

一日遅れたという……

どうぞ

特別話 チャンピオン達のクリスマス

トーホク地方、シャクドウ島。此処はポケモンリーグ以外の行事では滅多に使われない島。しかし今日は、そのシャクドウ島に幾つもの客船が集まって来ている

「ふー、やっと着いた……此処がシャクドウ島か……」

豪華客船『アント・サンヌ号』に乗って此処にやって来た大勢の人の中にいる金髪の青年、旧カントー地方チャンピオン『グリーン』が一息付きながらそう言った

彼の手の中には一枚の手紙があった。その手紙に書いてあった内容とは――

「『パーティ参加資格は新旧問わずチャンピオンのみ、場所はシヤクドウ島、12/26日主催』……か。これだけで本当に良いのか？」

「まあ良いんじゃないかしら？」

「僕もあの人がこのパーティで何をするか分からないんだけど……なんだか楽しそうだからね」

現シンオウ地方チャンピオン『シロナ』と現ホウエン地方チャンピオン『ミツル』がグリーンの声に反応し、寄って来る

「あら、レッド君は？」

「ああ、またシロガネ山に籠ってるらしいよ。んでブルーもレッドの様子を見に行った……とさ」

「へえ……………リア充死ねば良いのに……………」

「あ、あはは……………」

シロナ、ミッルが黒いオーラを放ちながら言う……………その光景グリーンは苦笑いするしか無かった

「よつと。うお……………、こ、此処は何時来ても寒い……………」

「そそそそ、そうですね、つ、ツバキさん……………」

「おつ、主役の登場だね」

主役と呼ばれた人物、トーホク、ハウエン地方のチャンピオン『ツバキ』と現トーホク地方チャンピオン『ミドリ』が体を震わせがら船から降りて此方にやって来る

「来たわね、『リア充』」

「君は家で『ミドリ』ちゃんと『一緒に』お留守番してたら良かったのね……………」

「い、一緒……………だなんて……………」

「シロナさん、リア充はやメロ。んでミッル、何時からそんなに

怖くなつたんだ!？」

ミドリは頬を真っ赤にしながら、ツバキは急な寒さで若干青ざめた顔でそう言う

「……………ま、まあ四人とも……………外は冷えるし、早く会場にはいり」
「黙れ、ジムリーダーの分際で!」
「……………」
「……………」

『ジムリーダー』……………シロナとミツルが放ったその言葉が『深く』心に刺さったのが、グリーンは『酷く』落ち込んで冷たく、真っ白な地面に手を付く

「……………」

その姿に、啞然としてしまうツバキとミドリ

(キャラ崩壊激しくないか……………?)

ツバキは一瞬そう思ったが、殺されるかもしれないので止めた

「い、行こうか……………」

「は……………はい……………」

此処にいたら何か危険だと察知したツバキは急いで会場に入る

「…………どうせ俺なんて」

「リア充爆ゼロリア充爆ゼロ……………」

変わり果てた三人を残して……………

「どうも もす です。 この度はもすが主催するパーティーに来てくれてアリアドスが十匹ありがとウルガム「主催したのは私よ？ モスギスは引っ込んでなさい」むう、もすさん折角台本を暗記したのにシヨボポーンのポポポーンです」

会場に入ると意味不明な言葉を発している変な人、「モスギス」とこのパーティーの主催者であり旧トーホク地方チャンピオン「ギンノ」さんが其処にいた

「主催者ってギンノさんだったんだな」

「あ、唾…………いえ、ツバキさん。お久しぶりフリーザーのどうももすです。

ずっと一人でしゃもじの内職しながら待ってたでござるですよ」

……………なんかツッコミ所がいっぱいあるけどスルーしよう。疲れるだけだ

「いい加減、その変な口癖やめたら？ 久しぶりね、ツバキ」

ギンノさん、ナイスツツコミ有り難う御座います

「さて、パーティを始めましょうか。ツバキとミドリもこっちに来たら？」

「はいはい、いい子だからこっち来てもすと一緒にフレアドライブしましょう。キヤー」

「ええ！？」

「……それじゃあ、皆で乾杯でもしましょうか」

(無視した……………。「は、はい……………」

「それじゃあ、皆！ メリークリスマス！！」

『メリークリスマス！！！！』

「メリークリスマスライクのストライキでキヤーです。はい」

ギンノさんに続いて、一同が言う

モスギス、ちゃんと言おう

「そういや、なんで26日に？」

「できるだけ多くの人を集めたかったのよ。24日や25日じゃ

あ、家庭の用事とかあるじゃない？ まあ一日遅れだけど、大勢の方が楽しいでしょ？」

「えへへ、それもそうですよね」

「でもこんな所でパーティって考えもしなかったわ」

「ふふっ、そうだね」

あれ、シロナさんにミツル、居たんだ。てか上機嫌だな

そういえばグリーンさんh……

「ハ、ハハハハハ……どうせ俺なんか……」

……見なかった事にしよう。ごめん

そんなこんなで俺達は他の地方チャンピオン達とバトルしたり、しゃべったり、騒いだり……大いに楽しんだ。多分、今までで最高のパーティにちがいないな

「ふう……」

俺は一人外に出て夜風に当たっていた。あんなに冷えたのにパーティのお陰なのか、今となっては涼しい感じだ

「そこにいたんですか、ツバキさん」

「ん？ ミドリか」

「ミドリがやって来た……ん？」

突然、冷たい何かが俺の頬に触れた

「……あ、雪……ですね」

「雪……か」

もう何年も見ていないなあ……

と、ミドリが俺の側に寄ってきた

「……き、今日だけ……一緒に良いですか？」

「……良いよ」

俺はふっと笑いをかけて、ミドリの側に寄る

「綺麗ですね……」

「そう……だな」

「来年も……一緒に見れると……良いですよね」

「うん……そうだな」

気が付けは……俺達は手を繋いでいた

「……ふふっ」

「……えへへ」

「……」

しかし、後ろにいた『誰か』によってそのムードは破壊された

そっー

「「コノ……リア充ガ……」」

……振り返ると、黒いオーラを放っているシロナさんとミツルの
姿が……

「「爆発シヤガレエエエエ！」」

はぁ……皆は……良いクリスマス……迎えたか？

そう思い、俺は意識を失いました

その頃――

「……ぐすっ」

招待されず、忘れられていた『カズキ』とかいう名前の少年が――
人、ハクジタウンにいたんだとさ

特別話 チャンピオン達のクリスマス（後書き）

はい、クリスマス記念の特別編でしたっ

モスギスは本当に意味不明です

でわっ

……………ツバキ、一回爆発しろ

特別話 ツバキと年賀状（前書き）

明けましておめでと〜いぞいませ〜！

どぞっ

特別話 ツバキと年賀状

ジリリリリリリッ！

「ふあ〜〜……良く……寝た」

赤髪の青年、ツバキはアイマスクを外し、ダルそうに欠伸する。
正月になっても、彼のすることは変わらない

「今は……9時か。もうちょい寝よ」

再び寝ようとするが、モンスターボールから勝手に出てきたポケモンがツバキの頭をつついた

「クジャっ！ クジャっ！！」

「つてえ……寝たら悪いかよ」

「クジャっ！」

それに応じてポケモンは頷く

「……はあ、分かったよ。俺の負け、戻れ『コクジャク』」

ご機嫌になった『コクジャク』と呼ばれたポケモンは、すんなり
モンスターボールの中に入っていった

「んー……ポストの中、見てみるか」

ツバキは上着を着て、外に出る

「……………寒っ」

玄関に出て、身震いしながらポストを確認すると……………

「……………えええ」

大量の手紙が詰まっていた。ていうか、あまりの量に何枚かはみ出していた

「いや、こんなにいっぱい……………どうしろと」

沢山年賀状が来るのは嬉しかった

だが、多すぎるだろうという気持ちもあり、今のツバキの表情は微妙だ

「うう……………冷えてきたし、フリーディン、テレポート」

「……………ディン」

シュツ……………

大量の手紙と共に、ツバキは家の中に瞬間移動した。フリーディンは何故か不機嫌そうだった

ごめん、フリーディンは移動要因にしか基本使わないから by

ツバキ

「さて……見てみるか」

早速手紙の内容を確認する

「えーつと、『明けましておめでとう、これからも宜しくね。ところで貴方との決着が付いてなかったわね、またバトルしましょうギンノ』『明けましておめでとう御座います、ツバキさん。今度またバトルしましょう!! サトシ』……」

(もしかしてみんなおなじ内容だったりして……)

チャンピオン、ジムリーダーの年賀状だけを集めて読んでいくと数十分……

「……………」

案の定、ほぼ全員がほぼ同じ内容の年賀状だった

その手紙の中には、『決闘状』と書かれたものや、場所、日付など書いてあるものもあった

「……………」 やりすぎだろう」

「思わず、額に手を当ててしまう。」

確かにどのトレーナーも、ツバキに黒星を付けてはいないが、流石にどれも同じ内容ばかりで読む気が失せてくる

「はあ……取りあえず、他のを見るか……あ、まだグリーンのを読んでなかったな……」

グリーンOfYear賀状をしてみる。その内容とは……

「『ジムリーダージムリーダージムリーダージムリーダージムリーダージムリーダージムリーダージムリーダージムリーダージムリーダージムリーダージムリーダージムリーダージムリーダージムリーダー』怖いわあああっ!!?」

体が勝手に動き、年賀状を投げ捨てた

グリーンOfYear賀状は墨で書いてあったので怖さが一層増している事分かる

「ぜえ……ぜえ……次いくか……」

今度はミドリOfYear賀状か……少しはまともになるかな……

期待しながらもやや不安になりつつ、それを読む

「『明けましておめでとう御座います、ツバキさん！ あれから一年……時の流れは速いですよね。』

また機会があれば、お会いしたいです。そして、また一緒に雪

見れたらなあ……なんて思ったり、えへへ
今年も宜しくお願いしますね！ ミドリ『……』

他のと比べたら遥かにまともだ……

うん、期待して良かった！……

そのまま、次の手紙を読んでいく

「次はモスギスか……あまり期待しないでおこう」
もすと契
約して魔法s『ビリイっ！』

……あ……破っちゃった

「でも……うん、なんかね……もう年賀状じゃあないだろ」

「結局まともなのはミドリだけかよ……年賀状は全部読んだし、
初詣にでも行くか」

と、外に出ようとするが……

「ツバキさん、郵便です」

(げ)……まさか「は、はい」

「全てツバキさん宛です」

予想が的中。もう嫌だよー……

一応見てみるが、知らない名前はわかりだった

「えっと……作者から？『はっはっはあ！ どうだこの大量の年賀状は！？ 全て非リア充の方々と一緒に書いたものなのだあ！』
……………」

年賀状に書かれていたのは、『リア充爆ぜろ』とか『俺達は異性から手紙なんてもらわないだぞ！！ リア充め！』とか……『リア充爆ぜろ』……あ、シロナさんとミツルのか

取りあえず作者死ねよ

もう一度外に出て、ズバットを繰り返す

「ズバット……最大パワーで作者を殺せえええっ！！」

そう思いつきり叫んだ。ズバットはそれに応じて、『エアスラッシュ』を放つ

そして……

ん……？ 何だ……ってちょ、ギャアアアアアアアア！！？

作者にヒットしました（笑）

はあ、すつきりした……今年は『面倒な事になりませんように』
ってお願いしないと。みんなは良い一年を遅れよ？

特別話 ツバキと年賀状（後書き）

なんか銀魂ネタが出てしまいましたが、後悔はしてないっ！（キラッ

そういや異性に年賀状、貰ったことないな（笑）

それでわっ

第十六話 ロケット団と初エンカウント（前書き）

本編を書くのはかなり久しぶりです

十六話目、どぞっ

第十六話 ロケット団と初エンカウント

「着いた……」

目の前には真っ赤な屋根が目印のポケモンセンターが

「はあ……はあ……速いですよ……ツバキさん……」

息を切らしながら十代の少年、サトシ君はそう言いながら俺の側に来る

「ごめんごめん、何せ急いでるもんだから……」

「そういえば……さっきズバットがやったあの技……」

「ああ、アレはね、『ブレイブバード』っていうひこうタイプの技なんだよ

高威力な代わりに自分が反動を受けるけど、結構頼りになる技かな」

まあ、このAG時の服装から見るとシンオウに行っていないし知らないのも無理ないか

「すげえ……『ブレイブバード』……俺も出来ると思いますか？」

目を輝かせて俺に訪ねる

おおっ、そう来たか……此処で教えたら原作ブレイクになりそうだな……まあいいや

「ひこうタイプのポケモンなら出来ると思うけど……どうだろ」

「ひこうタイプなら……『オオスバメ』！ キミに決めた！」

「スバーっ！！」

サトシ君のボールからオオスバメが出て来る。ああ確かこんな奴がいたな……懐かしい

そんな事を思っていた矢先、怪しそうな三人組が現れる

「はいはい！ こちらポケモンジャーナリストの、ムサリンですっ！」

「カメラマンの、コジオと言います」

「同じく、カメラマンのニヤス山ニヤ」

マイクを俺達の前に出して、自己紹介をしてくる

「はい！ 貴方方には是非インタビューを！」

えっと……こいつらどっかで見たことある顔だな……

「えっと……急いでるんで……」

「俺も……」

俺はズバットの入ったモンスターボールを取り出し、サトシ君は

ピカチュウを抱えたままポケモンセンターの中に入ろうとするが……

(スキありいっ!!) 「ハブネーク! 『くろいきり』!」

いきなり女性が投げたのボールの中からハブネークが現れ、黒い霧をはき出す

「!?!? ゴホツゴホツ!」

オオスバメが瞬時に霧を払うがその止んだ先には……

「ハーツハツハツハイっ!」

「ピカチュウ& amp ;ズバット、ゲットニヤ!」

三人組が俺のボールと檻に入れられたピカチュウを持っていたって……!!

「!?!」

「! ピカチュウ!! お前ら何すんだよ!!」

「『お前ら何すんだよ!!』との声がする……」

「地平線の彼方から」

「ビックバーンの彼方から」

「我らを呼んでる声がする」

「お待たせニヤー！」

「「「とっつー!!」「」」

服を脱ぎ捨て、三人は白い服装に……まさか……コイツらって……

「健気に咲いた悪の花」

「ハードでスウィートな敵役」

「ムサシ！」

「コジロウ！」

「ニヤースでにやーす！」

「ロケット団の在る所」

「世界は……」

「宇宙は……」

「「「君を待っている!!」「」」

「ソーナンス！」

「マーマネ！」

全員で最後の台詞を終えた後、ソーナンスとマーマネ共に三人は決
めポーズをする

「ロケット団!」

「うおおおおおおおっっっ!」

「「「「へ?」」」」

俺を除く全員は思わず間抜けな返事をしてしまう……

「……………あ、声に出てたか?」

また興奮してしまった(笑)っと、こんなことしてる場合じゃないな……

「ロケット団、俺のピカチュウとツバキさんのズバットをどうするつもりだ!」

サトシ君はロケット団に怒鳴る

「コイツらはボスにプレゼントするのニヤ」

「ふざけんな! ピカチュウ、10まんボルト!」

「ピ……………ピカ……………」

サトシ君が指示するも、ピカチュウから電撃が放たれることはなかった

さっきのバトルでの疲れだな……

てか、取り敢えず落ち着こうサトシ君

「『『それじゃ、帰る！』『『

ニヤースの顔型の気球に乗って、ロケット団はその場から撤退する

「！！ 待て！！」

「サトシ君、ここは俺に任せてくれないかな？」

俺はサトシ君を止める

「え……でも……！」

「大丈夫、少しあいつらには O S H I O K I が必要だから」

笑顔でそう言う。人のポケモン盗ったんだ、覚悟良いよね？

「『コクジャク』……バトルスタンバイ！！」

「クジャーーーっ！！」

俺はひこうタイプのコクジャクを繰り出す

「何だあのポケモンは！？」

サトシ君は直ぐさま図鑑を取り出し確認するが……

? データ不明?

「!？」

……まあ、そうなるよね。別の地方のポケモンだし
それじゃ、やるか

「コクジャク、『ゴットバード』!!」

「クジャア……………!!」

コクジャクは体に光を溜め込み、目を閉じて集中する

「行けえっ!!」

「クジャーっ!!」

俺の号令と共にコクジャクは光を纏いながら翔び立つ

「速い!？」

まあ、こんなもんだよ

そんな事を思っていた間にも、コクジャクとロケット団の気球の
距離が近付いていく

「? 何か近付いて……………」

気付いた時はもう遅かった

「クジャー……………!!」

何故なら既にコクジャクは気球を貫いていたのだから……

ドオオンっ！

「終わり……だな」

小規模な爆発が起こり、三人はそのまま吹っ飛んでいく

「……ヤな感じ……！」

キラーン

空に叫び、星となった

そして、俺のボールとピカチュウが落ちて来る

「ピカチュウ！ 良かった、無事で……」

こうして、直ぐにポケモンセンターでズバットとピカチュウを預け—先ず一件落着となった

シヨーにはまだ間に合うかな

第十六話 ロケット団と初エンカウント（後書き）

ロケット団瞬殺（笑）

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1489y/>

ポケモンの世界に来てしまいました。

2012年1月6日21時49分発行